

### 万葉類歌比較研究

間宮, 厚司

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

52

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2006-03-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002930>

# 万葉類歌比較研究

間宮厚司

## はじめに

『万葉集』には千年以上にわたる膨大な研究の蓄積がある。したがって、その上にさらに研究を重ねるとすれば、それ相応の意味が必要だ。『万葉集』には類歌と呼ばれる表現の類似した歌が多数存在する。にもかかわらず、類歌に関する先行研究は決して多くない。主立ったものを次に示そう。

- 佐佐木 信綱 『万葉集の研究 第三 万葉集類歌類句攷』(岩波書店、一九四八年)
- 水島 義治 『万葉集東歌類歌攷序説』(『万葉の発想』桜楓社、一九七七年)
- 大久間喜一郎 『万葉類句歌考(改訂版)』(『古代文学の伝統』笠間書院、一九七八年)

従来の類歌研究は、何をもって類歌と認定するのかという判断基準と、類歌の分布状況から『万葉集』の編纂過程を解明しようとする点に重きを置いていた感が強い。そのため、注釈書類をひもといても、何番歌と

何番歌とは類歌の関係にあつて同じ発想の歌だとか、似た表現であるが趣は異なるなどと指摘される程度で済まされる場合が多く、やや等閑視されていたきらいがある。

これまで筆者は、類歌(異伝歌もここでは広く類歌として扱う)に関連した小論を三つ公表している。

生ケリトモナシと生ケルトモナシ(『鶴見大学紀要・国語国文学篇』二七号、一九九〇年三月)

「高島の安曇川波は騒けども」の解釈をめぐる(橋本達雄編『柿本人麻呂《全》』笠間書院、二〇〇〇年)

万葉歌(二五九七番と三二五九番)の解釈(『法政大学文学部紀要』四七号、二〇〇二年三月)

右の拙論に続くものとして、本稿では類歌を手がかりに様々な解釈の方途を探り、万葉歌の理解に新たな視界をひらきたい。ここで取り上げる類歌は三組である。

### 一 一四七一番と二二一九番

- ④ 恋しけば(恋之家婆) 形見にせむと我がやどに植多し藤波今咲きにけり(万八・一四七一)
- ⑤ 恋しくは(恋之久者) 形見にせよと我が背子が植多し秋萩花咲きにけり(万一〇・二二一九)

右の二首が、どのように解釈されているか、新編日本古典文学全集と新日本古典文学大系の口語訳を示そう。

新編日本古典文学全集

① 恋しくなったら 偲しのびぐさにしようと思つて 家の庭に 植えた藤の花は 今咲き始めた

② 恋しくなったら 偲しのび草くさにせよと あなたが 植えてくださった秋萩あきは 花が咲き始めました

新日本古典文学大系

③ 恋しかったら形見にしよう私の庭に植えた藤の花が、今咲いたことである。

④ 恋しかったら形見にして偲しのべと、我が夫が植えた秋萩は花が咲きました。

⑤⑥の初句は、どちらも仮定表現で解されている。これは手元にある他の注釈書で確認してみても同様である。

ところが、③の「恋しけば」については「恋しけ」が未然形とも已然形とも考えられる語形のため、〈未然形＋バ〉の仮定表現ではなく、〈已然形＋バ〉の確定表現でも解釈可能とする意見がある。

例えば、安田尚道『万葉集の文法』（『国文法講座4 時代と文法―古代語』明治書院、一九八七年所収）は、「それが未然形で仮定表現なのか、已然形で確定表現なのかの判定に苦しむような例がいくつもある」（五八頁）と書いた後に③の「恋しけば」の歌を挙げ、「もし……ならば」の

意とも「……である時にはいつも」の意とも解しようと説明している（五九頁）。つまり、③は「もし恋しいならば……」と、「恋しい時にはいつも……」の両方の解釈が可能であるという指摘である。

また、山口佳紀「形容詞活用の成立」（『古代日本語文法の成立の研究』有精堂、一九八五年）は、これまでの注釈書が③「恋しけば」を〈未然形＋バ〉の仮定表現で解しているのに対し、新解釈を提出した（二九六頁）。それは、⑥の「恋しくは」で始まる明らかに仮定条件句を用いた類歌はあるものの、④「恋しけば」を仮定条件で解する現状に疑問をさしはさむ余地があるという。そう考える根拠として、④「形見にせむ」と⑤「形見にせよ」との微妙な違いに注目する。すなわち、⑤で「恋しくは形見にせよ」と言ったのは我が背子であるが、「恋し」と思うのは歌の作者のほうだから、我が背子の側からすれば、仮定法でいうのがふさわしい。けれども、それに比べて、④で「恋しけば形見にせむ」と思ったのは歌の作者であるから、「恋し」を仮定条件でいうまでもなく、事実恋しいとして、確定条件を用いたと考えることも可能であると示唆する。

⑥の「恋しけば」が仮定表現か確定表現かを判定するのに、まず確認しておきたいのは、『万葉集』における「……ば……せむ」という⑥と同じ構文をもつ歌の「ば」の上が未然形なのか、それとも已然形なのかという点である。以下、新編日本古典文学全集の訓読に従い、その全例を示す。

① 絶ゆと言はば（絶常云者）わびしむせむと焼き大刀のへつかふこと

はさきくや我が君(万四・六四一)

② 潮満たば(塩満者) いかにせむとか海神の神が手渡る海人娘子ども  
(万七・一二一六)

③ 秋さらば(秋去者) 移しもせむと我が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけ  
む(万七・一三六二)

④ 秋さらば(秋去者) 妹に見せむと植多し萩露霜負ひて散りにけるか  
も(万一〇・二二二七)

⑤ 春さらば(春去者) かざしにせむと我が思ひし桜の花は散り行ける  
かも(万一六・三七八六)

右の五首を見ると、すべて〈未然形+バ〉になっている。問題の箇所は仮名表記でないから、〈已然形+バ〉で訓じる可能性も考えなくてはならない。しかし、①～⑤は他の注釈書で確認しても、〈未然形+バ〉で訓まれている。それならば、④「恋しけば」も〈未然形+バ〉と考えるのが形式上穩当であろう。また、歌を解釈する点からも、例えば④を「秋が来たので妻に見せようと植えた萩は露を受けて散ってしまった」と〈已然形+バ〉で解するのは変であり、「秋が来たら……」の〈未然形+バ〉のほうがふさわしい。それならば、④「恋しけば」も〈未然形+バ〉がよいであろう。これはセムトの助動詞ムが未然態を表すので、〈未然形+バ〉と応じたものと考えられるが、この点に関して、山口佳紀「希望表現形式の成立」(『古代日本語文法の成立の研究』有精堂、一九八五年)は次のように述べ、実例を示す(五四七～五四八頁)。

〈已然形+バ〉の後には既然態の来ることが多いが、未然態の来ることがないではない。

生ける者遂にも死ぬるものにあれば(有者) この世なる間は楽しくをあらな(有名) (万三・三四九)

明石鴻潮干の道を明日よりは下笑ましけむ(下咲異六) 家近づけば(家近附者) (万六・九四一)

赤駒が足がき速けば(速者) 雲居にも隠り行かむ(隠去) ぞ袖まけ我妹(万一一・二五二〇)

心をし君に奉ると思へれば(念有者) よしこのころは恋ひつつをあらむ(将有) (万一一・二六〇三)

右のような例がある以上、問題にしている④「恋しけば形見にせむと……」も、〈已然形+バ〉の後に未然態の来たものと語法的には同じと見なすことができる。

そうすると、④は「恋しいから形見にしよう」と・恋しいので形見にしようとなのか、「恋しかったら形見にしよう」となのかを、別の視点から決定しなければならぬ。そこで、④がどのような状況の歌かを知るために前後六首を列挙してみる(読み下しは新編日本古典文学全集による)。

ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに(万八・一四六五)

神奈備の磐瀬の社のほととぎす毛無の岡にいつか来鳴かむ(万八・

一四六六)

ほととぎすなかる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも(万八・一四六七)

ほととぎす声聞く小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏しき(万八・一四六八)

あしひきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常に憊はゆ(万八・一四六九)

ものふの磐瀬の社のほととぎす今も鳴かぬか山の常陰に(万八・一四七〇)

②恋しければ形見にせむと我がやどに植ゑし藤波今咲きにけり(万八・一四七一)

ほととぎす来鳴きとよもす卯の花の共にや来しと問はましものを(万八・一四七二)

桶の花散る里のほととぎす片恋しつつ鳴く日しそ多き(万八・一四七三)

今もかも大城の山にほととぎす鳴きとよむらむ我なけれども(万八・一四七四)

なにしかもこごだく恋ふるほととぎす鳴く声聞けば恋こそ増され(万八・一四七五)

ひとり居て物思ふ夕にほととぎすこゆ鳴き渡る心しあるらし(万八・一四七六)

卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよもす(万八・一四七七)

澤潟久孝『万葉集注釈』(中央公論社)によると、②の「恋し」の対象はホトトギスではないと説く。一方、中西進『万葉集』(講談社文庫)は、ホトトギスが恋しくなったら形見(ホトトギスをしのぶすが)にしよと解釈すべきだとし、これは女性への恋ではないと脚注で指摘する。確かに②の歌の前後にはそれぞれ六首ずつすべてホトトギスを詠み込んだ歌が並んでいる。しかも、②の歌は「夏の雑歌」の一四六五から一四九七番歌に含まれており、「夏の相聞」は一四九八番歌から始まるので、「部立」の点からも、②は男女の恋の歌とは考えにくい。②にホトトギスの語はないが、「藤波」がある。「藤波」はホトトギスと取り合わせて、初夏に詠まれることが多い。一つ例を示そう。

藤波の散らまく惜しみほととぎすいまま今城の岡を鳴きて越ゆなり(万一

〇・一九四四)

②の歌は、目の前でホトトギスが鳴いている時点で、もし鳴かなくなつて恋しくなったら、と仮定して歌つたものだろう。②「恋しければ(恋しくなったら)」は、「植ゑし」の時の気持ちである。したがって、②を確定条件で「恋しいから・恋しいので」のように解すると、「植ゑし」の段階ですでに孤独で恋しいことになる。しかし、それは考えにくいのではないか。「植ゑし藤波」と「今咲きにけり」は、過去(恋しくなった時)のために藤波の花が咲くのを願つて植えた)と、現在(今まさにその花が咲き始めてホトトギスに会える季節がめぐつて来た)が対比されてい

るのだから、仮定表現をとるほうが文脈的に落ち着く。それには次の例が参考になる。

◎君来ずは（君不来者）形見にせむと我が二人植多し松の木君を待ち  
出でむ（万一一・二四八四）

◎と④は類歌とされていないが、◎「形見にせむと我が二人植多し松の木」と、④「形見にせむと我がやどに植多し藤波」は、非常によく似た表現である。そこで、◎の初句「君来ずは」はどうかというと、「あなたが来ない時には（形見にしようと思って私たち二人で植えた松の木はマツの名のとおり、あなたを待ってきつと出て来させるでしょう）」の意だから、仮定条件句を構成している。つまり、「植多し」の時に二人は一緒で、その時に「あなたが来なかつたら」と歌っているのである。また、これは①～⑤の初句が（未然形＋バ……セムト）で、すべて仮定表現になっていることとも一致している。

ここで、④⑤を列挙してみよう。

④恋しけば形見にせむと我がやどに植多し藤波今咲きにけり（万八・一四七一）

⑤恋しくは形見にせよと我が背子が植多し秋萩花咲きにけり（万一

〇・二一九）

◎君来ずは形見にせむと我が二人植多し松の木君を待ち出でむ（万一

一・二四八四）

④「恋しけば」は形容詞の古い仮定条件、⑤「恋しくは」は形容詞の新しい仮定条件、◎「君来ずは」はズハを用いた仮定表現で、三首とも「恋する対象がいなくなつて恋しくなつたら」という気持ちを表現している。

以上を踏まえ、④⑤⑥の内容を分析すると、次のようになる。

④↓作者は山部赤人で男性・植えたのは作者自身・恋する対象はホトトギス・季節は藤波が咲いたので初夏

⑤↓作者は女性・植えたのは相手の我が背子・恋する対象は我が背子・季節は秋萩が咲いたので秋

⑥↓作者は女性・植えたのは二人・恋する対象は我が背子・季節は特定せず（むしろ何時でもよい）

これら三首は、仮定表現で歌い出し、「形見」と「我が……植多し」が同じ歌詞で、「藤波・秋萩・松」という植物を詠み込む点で共通するのであるから、類歌と見なしてよいのではないか（これまで◎は④⑤の類歌として認められていないようだが）。④⑤は結句で「咲きにけり」とあるので、現在の緊迫感が際立っている。それに比べて、◎は「松と待つ」で言葉遊びの趣向を凝らし、技巧的である。表現のあり方や恋する対象等を考慮すれば（想像の域を出ないが）、④↓⑤↓◎の順に前歌を模倣する形で作られたのではないか。

## 二 二四七八番と二七五四番

①秋柏潤和川辺の(潤和川辺)篠の目の人には忍び君に堪へなく(万  
一・二四七八)

②朝柏潤八川辺の(閩八河辺之)篠の目の偲ひて寝れば夢に見えけり  
(万一一・二七五四)

ここで検討したいのは、②「閩八河辺之」の「八」字の読み方である。ウルヤと訓む新編日本古典文学全集は当該歌の頭注で「八」の字に関して、「ハ・ヤと音訓両様仮名でウルハ…と読む説もあるが、漢字音の上からはハの音を写すのに適当でなく、用例も少ない」と解説する。そして、現行のほとんどの注釈書は、このウルヤの訓を採用している。

一方、ウルハと訓じる日本古典文学大系は、「朝柏―枕詞。朝の柏の葉の潤う意からウルハカハにかかるか、朝の柏がウルハシイ意か。○閩八川―二四七八の潤和川と同じであろう」という頭注を付す。

また、山口佳紀「子音交替(へ上)」(『古代日本語文法の成立の研究』有精堂、一九八五年)は、②の「八」字の訓み方について、問題点を指摘した上で、ウルハと訓じるのがよいと次のように述べる(一四〇頁)。

ウルヤカハへ―ウルワカハへについては、従来「閩八河辺」をウルハカハへと訓み、ウルワカハへの方は、ハ行転呼音の古い例とさ  
れていた。しかし、稲岡耕二『万葉表記論』によれば、万葉集にお  
いて、「八」字はヤを表わすのが普通で、ハを表わすのは極めて限ら

れた場合であるが、正訓字あるいは訓仮名に前後を挟まれた音仮名は、仮名として音専用と見られるものか、音訓両用仮名中で音仮名頻度の高いものに限られるから、「閩八河」はウルヤカハと読むのが穏当という。従って、ウルヤカハへ―ウルワカハへはj―w間の交替かとも考えられるが、この型の交替は、他に確実な例がなく、疑わしい。また、別の河川名とするのも一案であるが、

朝柏 閩八河辺之 小竹之眼笑 思而宿者 夢所見来(二七五四)  
秋柏 潤和川辺 細竹目 人不顔面 公無勝(二四七八)

と並べて見るに、それも強引であろう。大坪併治『訓点語の研究』の指摘することく、平安時代の訓点資料で、仮名遣の誤用として真先に現れるのが、ウルハシヴウルワシ(麗)であるというのも、無視できない。やはり、「閩八河辺」はウルハカハへで、「潤和川辺」はハ行転呼音の古い例ということになるのではあるまいか。その際、どうしてハ音を表わすのに例外的に「八」字が使われたかが問題である。「閩」字は、「潤」字と通用して用いられた例もあるが、一般には、閩月を意味するものとして使われており、その場合、「閩三月」「閩五月」というように、直後に数字の来ることが多い。そのような背景があつて、「閩」字の直後に「八」字が選ばれてしまったのはななころうか。なお、「閩」字を万葉集中に用いたのは、「閩八河辺」の例と、ヌル・ヌラスの表記に用いた三例のみであるが、その三例とも人麻呂歌集所掲の旋頭歌に出て来るのは、表記の特異性を示すものとして、興味深い。

右の説明は説得的で納得できる。ただし、いくつか確認・補足しておきたいことがある。

まず、②の「閨」字を、日吉盛幸『万葉集漢文漢字総索引』（笠間書院、一九九四年）で調べると、歌以外の箇所では次のように全例「閨」字の後は数字が来ており、何月であるかを表している。したがって、ウルハを「閨八」と表記した理由は、視覚的なものが影響したということ、山口説に首肯できよう。

「閨三月」（万八・一四五三〔目録・題詞〕、万一七・三九二七〔題詞〕・万一九・四二六二〔目録・題詞〕）

「閨五月」（万一八・四一一二〔左注〕、四一一五〔左注〕、四一一二

〔左注〕、四一一三〔題詞〕、四一一六〔題詞〕、四一一六

〔目録〕）

「閨七月」（万一七・三九二七〔題詞〕）

なお、「閨八月」の例は、『続日本紀』の天平宝字元年にある。

また、「四八津（四極）」（万六・九九九）や「八信井（走井）」（万七・

一一一三）のようにハの音に「八」字を当て、固有名詞を表記した例が見られる。問題の「閨八川」も固有名詞である。

加えて、①のウルワカハ（潤和川）は「訓・音・訓」表記だから、②をウルハカハ（閨八河）と訓じれば同じ「訓・音・訓」で、互いにパラレルな文字配列になる。

それに、ウルハカハという川の名は麗しい川という意味合いで命名さ

れたものであろうから（ウルハカハ）と分析されるが、このウルハという語形はどのように説明されるのだろうか。つまり、シク活用形容詞ウルハシ（麗）が名詞カハへ（川辺）を修飾する場合、通常は連体形のウルハシキカハへ、または語幹のウルハシカハへになるはずで、それがウルハカハへという語構成をとっているのは、なぜかという問題である。ウルハカハへはシク活用形容詞のウルハシのシが無い形で体言カハへを修飾しているが、これに類する例はある。

メヅラシ（愛）↓目頼子（梅豆羅古）来る（紀・歌謡九九）

アタラシ（惜）↓あたら舟木を（安多良船材乎）（万三・三九二）

結局、ウルハ（またはハ行転呼音のワ）カハへならば文法的に分析可能となるが、ウルヤカハへでは語の構成が不明であるし、なおかつ類歌のウルワカハへとの関係、すなわちウルヤとウルワで音が異なっていることについての説明に窮する。要するに、『万葉集』で「八」字はヤと訓むのが普通で、ハと訓むのは特殊なケースであるが、②の「閨八」についてはウルハと訓むべき条件が揃っているということを確認した。すると、①のウルワ（潤和）はハ行転呼音を生じた語形だから、②のウルハ（閨八）の歌のほうが先にできたと考えるのが自然であろう。

ここで、①②の歌を通釈してみる。

①ウルワ川のほとりの小竹の芽ではないが、他人には忍び隠すことができても、あなたの前ではあふれる心を抑えることができない。

②ウルハ川のほとりの小竹しのけの芽ではないが、あなたを偲おもんで寝たとこ  
ろ、その姿が夢に見えた。

いま、①と②の先後関係を推定しているが、新編日本古典文学全集の  
①の頭注に、「篠のノは甲類、忍ブのノは乙類と発音に小差はあるが、類  
音によってかけたのであろう」と解説する。それに対して、②のシノフ  
(偲)のノは甲類だから、上代特殊仮名遣いの上で矛盾がない。この点  
を考慮すれば、②のほうがウルハとシノの本来的な音を保っており、や  
はり②が先で、①は②をアレンジしたものということになるのではある  
まいか。

ところで、①「秋柏」と②「朝柏」は、ともに枕詞で、柏の葉が露に  
濡れて潤うところから、ウルにかけたと諸注で説明され、勿論それで理  
解できるのだが、このウル(潤)は、動詞ヌル(濡)と関連するのでは  
ないか。なぜなら、ウシ(大人)―ヌシ(主)、ウバタマ(黒玉)―ヌバ  
タマ(黒玉)、オク(置)―ノク(置)のように語頭子音nの無い形と有  
る形で関係づけられる語が存在するからである。これについては、山口  
佳紀「語頭子音の脱落」(『古代日本語文法の成立の研究』有精堂、一九  
八五年)を参照されたい。

さらに、①②の歌でウルに当てられた「潤」と「潤」の字は、『万葉集』  
で「濡れて行かむ見む(閩将往見)」(万七・二二七四)や、「濡れ漬でど  
(潤湿跡)」(万三・三七〇)のように、ヌル(濡)の表記にも使用され  
ている。こうした点からも、ウルとヌルはnの無子音形と有子音形の対  
応としてとらえられよう。

また、中本正智『日本語の系譜』(青土社、一九八五年)は、水を表す  
ㄱとみられる次の語を日本列島の方言から挙げて、語根のウルは水を表  
す語であったに違いないとまとめる(一〇一頁)。

ウルオイ	曇天、くもり	三重県宇治山田
ウルカス	水にふやかす	仙台
ウルケル	水にひたつてやわらかくなる	東北地方
ウルサイ	雨などにぬれた感じを表す形容詞	石見
ウルム	光沢を失う	滋賀県蒲生郡
ウルムシ	蝨 徳之島	
ウレー	にわか雨	静岡県周智郡
ウレーアソビ	久しぶりの雨で業を休むこと	岐阜県山県郡梅原

なお、『古今和歌六帖』を見ると、①が「あきかしはぬるやかはべのし  
ののめに人もあひあはずつまなしがちに」、②が「あさかしはぬるやかは  
べのしのめに人もあひあはずきみなしがちに」で、『万葉集』のウルが  
ヌルになっているが、これは「閩・潤」字をヌルと単に訓み誤ったもの  
だろう。

### 三 八七番歌と八九番歌

①ありつつも(在管裳) 君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置く  
までに(万二・八七)

②居明かして（居明而）君をば待たむぬばたまの我が黒髪に霜は降るとも（万二・八九）

②は①の異伝歌であるが、これまで②の初句は諸注でキアカシテと訓じられ、おうふうの『万葉集』の頭注にも異訓は見られなかった。

最初に、稲岡耕二『万葉集全注』（有斐閣、一九八五年）の解説を見よう。

【注】○居明かして キルは元来座っている状態をいう語であるが、ここは闇に入つて寝ず、戸外で夜を明かすことをキアカスと言つたのであろう。古典全集に「居明カスがすわつたまま夜を明かす意であるとすれば、この歌の作者は霜に降られて外にすわつていたことになる。おそらく、八七の歌の初句を部分的にさしかえた結果、このような矛盾が生じたのであろう」と記すのは、キルの意味を限定しすぎるのではあるまいか。

ところが、新日本古典文学大系（一九九九年）は従来の訓み方と異なり、②の初句「居明而」をヲリアカシテと訓む。その脚注をみると、こう説明されている。

▽初句「をりあかして」は、「ゐあかして」とも訓み得るが、後者の場合は「座つたまま夜を明かして」の意となるので、前者の訓を採る。本居宣長は、「居り明かす」の語について、「大かた此たぐひの居

は、ただ一わたり軽くつねに云ふとはかはりて、夜寝ずに、起て居る意也、軽く見るべからず」（玉勝間十四・夜寝ず起てゐるを居と云へる事）と指摘している。「居りあかしも（平里安加之母）今夜は飲まむほととぎす明けむ朝は鳴き渡らむそ」（四〇六八）。

ここでは②の初句がキアカシテなのか、それともヲリアカシテなのか、検討を加えたい。

この問題を考える際に、阪倉篤義「動詞の意義分析―キルとヲリとの場合―」（『国語国文』第四六巻第四号、一九七七年四月）は、有益で逸することのできない論文である。以下、阪倉論文の中で得られた結論に相当する部分を引用したい。

まず考えられることは、キルという動詞が、ヲリに比して、一定の場所における比較的短時間の存在を意味するということであろう。すなわち、既に言われている通り、鳥について言えば「とまる」というに近く、天然現象などについても、それが一時的に現象するさまを、キルと表現したのである。（中略）すなわち、キルは、あるものの存在のしかたを、進行的な動作として把えて、これを具象的に記述する動詞である。それに対して、ヲリの方は、存在を、継続的な状態として把え、これを話し手の立場から、様態として描写するものである、と。

これは『万葉集』の用例を徹底的に調査して、得られた特徴的な事実

である。②の初句を「アカシテ」と訓じると、座っている姿勢のほうに重点が置かれてしまい、寝ずに朝までずっと起きているという継続的な意味は出てきにくい。①のほうはアリツツモと歌われているが、『万葉集』にアリツツは計一四例あり、そのままの状態を保ち続ける意を表している。ならば、②の「居明而」は、リアアカシテと訓むべきであろう。リアアカシテの訓は、『万葉代匠記（初稿本）』が最初である。阪倉論文では次のように記述するのみで、問題の句を「アカシテ」と訓む説に従い、特に言及していない。

ちなみに、この両語が複合動詞の前項になることは稀で、ヨリについては「ヨリ明かす」、キルについては「キル明かす」「キ枯らす」「キ散らす」くらいが認められるのみである。

ここで一つ気にかかることがある。それは「アカシテ」と五音の非字余り（句中に単独母音を含むのに字余りになっていない）で訓むのがよいのか、それとも「リアアカシテ」と六音の字余り（句中に単独母音を含む）で訓むのがよいのか、という問題である。

毛利正守「万葉集の五音句と結句に於ける字余りの様相」（『万葉集研究』第一七集、一九八九年）は、短歌の五音句で、「三音節目」以前に母音が位置しても字余りを起こさない最も際立った形として、ここで問題にしている「アカシテ」を挙げている。

それを受けて、山口佳紀「字余り論はなにを可能にするか」（『国文学・解釈と教材の研究』一九九〇年五月）は、「アカシテではなく「リアアカシテ」と訓めば、句中に単独母音を含む字余りの形で訓むことができる」と述べ、その傍証例として、家持の「平里安加之母」（万一八・四〇六八）を示した。これも問題の句と同じ初句の例である。従うべきであろう。

以上、キルとヨリの語義および字余りの観点から、②の「居明而」はリアアカシテと訓むのが妥当という結論に至った。さらに補足するならば、阪倉論文の次の記述は当該歌にとって極めて示唆的である。

「恋ひヨリ」「うらぶれヨリ」のごとき、精神状態を意味する動詞との複合語（これに、さらに、「恋ひつつヨリ」のごとき句形式のものを加えれば、その数は愈々増大する）は、キルについては全く認められないところであって、ここに両者の用法上の相違が、かなり明瞭に表われているようである。

つまり、②は「恋をし続けた精神状態で寝ずに夜を明かして」の意であるから、リアアカシテがふさわしく、かつ異伝歌の關係にある①が「ありつつも」なので、②も「をり明かして」と同じ存在する意を表すラ変動詞で対応しているのが見るのが穏当である。キルは移動するものが一時的に静止していたり、人間の場合は座っているという姿勢を明示する語である。よって、「アカシテ」では「ちよつと座つたまま夜を明かして」という意味合いになり、長時間待ち続ける「我が黒髪に霜は降るとも」とマッチしない。

## おわりに

以上、三組の類歌をオムニバス形式で取り上げ、考察した。類歌の比較研究にどのような可能性があるのか、現時点では試行錯誤の段階にある。したがって、歌の解釈・訓読・先後関係と視点がまちまちで、全体としての統一感に欠ける点は否めない。最後に、今後の課題について少しふれておきたい。

① 大海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯のさやけさ（磯之清  
左）（万七・一二〇一）

② 大海の磯本揺すり立つ波の寄せむと思へる浜の清けく（浜之浄奚  
久）（万七・一二三九）

右の類歌は同じ巻七にあるが、第二句と結句が異なる。①の「水底とよみ」のミナソコは九例、トヨムは連用形トヨミに限っても二三例が『万葉集』に見られる。それに対して、②の「磯本ゆすり」のイソモトとユスルの例はこの一例のみである。また、①の「磯のさやけさ」のサヤケサはサヤケシの全語形（二九例）の三二%を占める九例あるのに対して、②の「浜の清けく」のキヨケクは二例しか見られず、キヨシの全語形（八七例）のわずか二%に過ぎない。

すなわち、①は『万葉集』の中でも普通に使われているベーシックな単語を用いているのに比べ、②のほうはほとんど見られない稀少語を使用しているのである。こうした場合、①が原歌で②はそれをアレンジし

たものと考えべきなのか、それとも逆に②が先で①が後に改変されたものなのか、あるいはそうしたことは一概に言えないのか。この問題は、幾組もの類歌を比較した上で総合的に判断しなければならない。

また、中には次のように作者が男女で異なる類歌がある。

今は我は死なむよ我妹逢はずして思ひ渡れば安けくもなし（万一  
二・二八六九）

今は我は死なむよ我が背恋すれば一夜一日も安けくもなし（万一  
二・二九三六）

新編日本古典文学全集は、右の二九三六番歌の頭注で、こう指摘する。

死なむよ我が背―類歌二八六九には「死なむよ我妹」とあった。伝

承歌には人称語を取り替えて作者の性別を逆にすることが多い。

作者の性が逆になっているケースも、どちらが先で、どちらが読み替えた歌なのか。そして、それを判別することは可能なのだろうか。

類歌の比較方法はケースバイケースで、様々な視点からアプローチする必要がある。引き続き、このテーマで研究を行おうと思っている。最終的には、『万葉集』の編纂論にまで発展しうる大きな問題である。